

公的な支援の対象になりづらい、いわゆる「制度の狭間」にあるような人たちと、徹底的に身近に向き合うことを行なってきた。経営的なことをいえば、地活Ⅲ型を続けるよりも就労B型などの福祉サービスに鞍替えしたほうがはるかに潤ったはずなのだが、そうすると他のB型や日中型サービスを利用している人には使えなくなってしまうし、利用料個別給付の仕組みによって利用者／非利用者の境はより鮮明になる。孤立と分断が想像される。だから現在に至るまで、あえて地活という形態にこだわってきた。

東日本大震災に際しては、平田氏は被災地に赴いてのボランティア活動にも従事している。もちろん誰に頼まれたわけでもなく、対象を選ばないその活動は氏の信念を一貫して伝えるものだが、ただその信念を支えるものがないのか、実を言うとまだゆっくり話を聞けていない。

『アルケミスト』も、諦めるか諦めないかの物語とも言える。数々の試練と迫られる選択にあたって、宝物をそれでも追い求めるか途中でやめてしまうかを私たちは見守ることになる。羊飼いの少年を導く天啓は、実は彼自身の「心の声」である。(物語のなかで一度だけ、少年は王様からもらった魔法のアイテムで先行きを占おうとするのだが、ウリムとトムミムと呼ばれるその二つの石のお告げは結局、少年に明快な針路をもたらしはしなかった)



「心の声」があっても、それに従い続けることは我々にとってたいてい難しい。途上、声を見失うことがしばしばある。それで福祉界限でも「意思決定支援」とか「欲望形成支援」とか、障がい当事者が人生を主体的に歩むための関わりがあり方が議論されるわけだが、先だってまず「支援者」と区分される側の人間が自身の主体性としっかり向き合えていなければ、いかなる旅も始めることはできない。

平田氏とミッドリンクは間違いなく、沖縄市の街角から「心の声」と真摯しんしに向き合い続けてきた。